# 「みちのく」像の成立と展開

### 佐々木 磬

を旅情に彩られた自然が息吹く仙境、とイメージしているメージであった。どうやら、現代の若者は、「みちのく」メージであった。どうやら、現代の若者は、「みちのは、出身地の別をこえて、「みちのく」=「緑豊かで閑寂の地」・ンケートをしてみた。それによれば、彼らに共通したのは、どう受けとめているのだろうか。過日、学生三十余名にアビう受けとめているのだろうか。過日、学生三十余名にアージを明代の人々は、

(--)

小稿の課題

れている。その「奥付」には、土着の漁師たちが自ら書き来』(文化四年)の首題には、「奥州松前志乗浜」と銘記さ

ようだ。

その一方、函館志海苔八幡社に伝わる『八幡宮御彩色由

留めた「奥州松前志法 百姓中」の文字もある。 留めた「奥州松前志法 百姓中」の文字もあるであろう。

し、地域名も「狄地」「胡地」と変わる。十三世紀に及んで、世紀に入ると、民族呼称も「エビス」と変化するのに呼応高見国」「蝦夷国」と、「国」呼称されていた。それが十一シ」と呼ばれ、この地域は相対的に自由な地として、「日八世紀のころ、北方地方に住める民・「蝦夷」は「エミハ世紀のころ、北方地方に住める民・「蝦夷」は「エミ

さらに、地域名、民族名もろともに、「夷嶋」(えぞがしま)、

『国史大辞典』(吉川弘文館)の「みちのく」(「むつのくに」でいることは、そう推測に困難なことではない。

民族呼称の背景に、中央と地方の凄絶な責めぎ合いが潜ん「エゾ」と変容するのである。この転変してやまない地域・

は、現在の福島・宮城・岩手・青森四県と秋田県の一部を代とともに北方に拡張した、他に例をみない国。最終的に東山道北端の国。領域は成立当初のままには国定せず、時と立項)には、こう解説されている。「むつのくに 陸奥国

ら、その段階的な成立と展開を跡付け、もってその北進化域的アイデンティティはいかに形成されたかに留意しながが歴史的概念として、どのように変遷的に北進し、その地るといえる。したがって、小稿では、この「みちのく」像アイデンティティを背景にした、すぐれて歴史的概念であびとは裏腹に、呼称変遷が示唆するごとく、一定の地域的ジとは裏腹に、呼称変遷が示唆するごとく、一定の地域的こうしてみると、「みちのく」像とは、現代の旅情イメー

の歴史的意味に少しく迫ってみたい

□ 「みちのく」像の生成

次に引用したい。 次に引用したい。 次に引用したい。 次に引用したい。 の北進化を余すところなく伝えるだけでなく、その成立 東」史料である。この「蝦夷」関連史料は、「みちのく」 ある。他でもなく、周知の林子平『三国通覧図説』の「蝦 あるという前の「解説」を、実によく裏付ける史料がここに でみちのく」像の領域が、「時代とともに北方に拡張」す

レタリ。其比、石碑ヲ城門ノ前ニ建テ去蝦夷国界一百マテ切従ヘテ鎮府ヲ宮城郡ニ造営シテ蝦夷ノ押トセラカリシ也。天平宝字ノ頃、恵美朝掲等漸ク桃生郡ノ辺国人ニ等キアツカイナリキ。此故ニ東征ノ役止コトナ然ル故ニ京家ニテハ奥羽ノ人ヲバ真ノ蝦夷ト心得テ外天平宝字ノ頃迄、奥羽ノ両州ハ王化ニ服セザリシ国也。

p 「みちのく」像の成立と展開

其ヨリ

津軽ノ外ガ

田村麿、大ニ征伐シテ終ニ多賀城ヨリ、小道八百四十四十余年ノ後、桓武帝ノ延暦中ニ征東将軍坂上大宿禰

今道一百四十里北ノ方、南部ノ大間、

北ヲ夷地ト定メラレタリ。是古ノ蝦夷国界也。

二十里ト記シテ今ノ桃生郡ノ辺ヨリ南ヲ日本ノ地トシ

ある。

その結果、「みちのく」の北限と「蝦夷」の国界=南限

に、三つの段階を経ながら北進している。 第三に、武田信宏が蝦夷国に乱入し、「多賀城ヨリ熊石」 第三に、武田信宏が蝦夷国に乱入し、「多賀城ヨリ熊石」 地トシ地ヲ夷地」とした=「中ゴロノ蝦夷国界」、そして 部ノ大間、津軽ノ外浜迄、服従セシメテ海ヨリ南ヲ日本ノ 定メタ」=「古ノ蝦夷国界」、第二に、坂上田村麻呂が「南 恵美朝掲が「桃生郡ノ辺ヨリ南ヲ日本ノ地トシ北ヲ蝦夷ト これによれば、「日本」と「蝦夷」との国界は、第一に

律令国家によって、従前の「東山道」の版図が桃生郡まで「古ノ蝦夷国界」が、このように確定したことは、古代「古ノ蝦夷国界」たる鎮守府のある桃生郡の辺りであった。ない。天平宝字の頃、この「みちのく」の北限の国界は、それ以北が「蝦夷」領域に属すことは、改めて言うをまた「日本」の北限の境界線までが、「みちのく」領域であり、

る。

Statistics No. 1908 押し上げられ、その領域の住民が「公民」化=「日本」化

て、「日本」化という名の征討・懐柔策を推し進めたので「まつろわぬ」蝦夷(エミジ)に対し、国家事業の一環とし別の言葉でいえば、古代国家はこの奈良朝において、されたことを示している。

姓とすることが多い。その意味で、「夷俘」は、前の政府(原漢文)とも見える。「夷俘」は、地名を氏とし、「公」を六月十一日条に、「帰降夷俘、男女惣て一千六百九十余人」その一方、同じく『続日本紀』天平宝字二年(七五八)

呼称とも考えられる。 に服従した「俘囚」と、 未服属の「蝦夷」との中間にある

れていくだろうことは、間違いない。 彼らに一定の「日本人」というアイデンティティが形成さ そこに、「俘囚」と「夷俘」の好むと否とにかかわらず、 強要されて、「日本人」化を余儀なくされたに相違ない。 と「夷俘」たちは、中央政府という上から、脱「蝦夷」を 思うに、桃生郡を周縁とする「みちのく」の中の「俘囚」 「蝦夷」と三区分されたことの意味は、測り知れず大きい 中央への「服属」を一つの物差しにして、「俘囚」・「夷俘」・ この奈良朝において、「蝦夷」「エミシ」がこのように、

らで、自分たちのアイデンティティを「蝦夷村」の中で形 (エミシ) のまま、北へ北へと追いやられて行く。彼らは彼 依然、中央政府にまつろわぬ「蝦夷」たちは、「蝦

け皿となりながら、その推進主体ともなっていく。 べき世の「みちのく」像というアイデンティティ形成の受 いし「夷俘」たちは、時の経過とともに、いつしか、来る 上から一方的に創り出された「日本人」たる「俘囚」な

#### $(\Xi)$ 「みちのく」像の成立

「みちのく」像の「線」としての生成を意味していた。そ 中ゴロノ蝦夷国界也。」と伝えていた。 二多賀城ヨリ (中略) 南部ノ大間、津軽ノ浜迄、服従セシ 引もしたように、その様子を『三国国通覧図説』は、「桓 域空間を形造るのは、平安~鎌倉時代のことであった。前 メテ海ヨリ南ヲ日本ノ地トシ北ヲ夷地ト定メラレタリ。是 武帝ノ延暦中ニ征東将軍坂上宿禰田村麿、大ニ征伐シテ終 の「線」が、徐々に広がりを持ち「面」として、 天平宝字の頃の「古ノ蝦夷国界」の決定は、言わば、 一定の地

外のなにものでもなかった桃生郡~南部大間 入されたのである。その意味で、南部の大間と津軽外ヶ浜 の地域が、平安~鎌倉期に、一気に「みちのく」地域に編 という北奥の北端部が「蝦夷国界」となった「中ゴロ」 (平安~鎌倉) の時代は、「みちのく」範域の拡大という点で、 前の「古ノ蝦夷国界」にあっては、まさに「蝦夷村」以 ・津軽外ヶ浜

(エビス) と、脱「蝦夷」をとげた「俘囚」「夷俘」との確執、 いて、あくまでも中央権力に与みしないとする「蝦夷 画期的なことであった。 このことは、逆からいえば、この時期、「蝦夷村」にお

大と「蝦夷村」の死守をめぐる決定的な攻防である。渦巻いて展開していたことになる。「みちのく」範域の拡中央権力との対峠も辞さない「蝦夷」の頑強な抵抗などが、

ぱにいえば、二つの側面から図られた。
この行政的な版図拡張と「日本人」意識の形成は、大ざっ識という名のアイデンティティの形成を伴うものである。本」地化の拡大であると同時に、その地内の「日本人」意本」地化の拡大であると同時に、その地内の「日本人」意味の拡大とは、

してみることにしよう。 してみることにしよう。 してみることにしよう。 は著の版図拡張を図したのは、言うまでもなく、政治権力と仏教伝播の相乗とするところに、「日本人」 としての「みちのく」像が結ばれていく。他律的に作り上 としての「みちのく」像が結ばれていく。他律的に作り上 としての「みちのく」像が結ばれていくことを、次に検討 であろう。 をされたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」意識の がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」を がられたものではあるといえ、そこには、「日本人」とし としてみることにしよう。

政治権力を介した「みちのく」像の形成と、一口にいっ(A) 「政治権力によるアイデンティティ形成」

ても、

大別しておよそ三つの階梯があったと考えられる。

平安~鎌倉時代がまったく均質ではない。

その形成

による「蝦夷村」支配であり、三つは、鎌倉幕府の東国経一つは、坂上田村麻呂の征討であり、二つは、平泉藤原氏

営である。

〈坂上田村麻呂の蝦夷征討〉

寺院関係の造立史料は、一定の吟味さえ施せば、活用しうを求められるが、小稿の行論上、『津軽一統志』の次の神社・いることは、人のよく知るところである。その点、慎重さ田村麻呂のこの征討事業には、数多くの伝説が付与して

るものと考えられる。

約六分の一の数は、当地への宗教伝播の一傾向を示していわ、一方、寺院の方は、表口が示すように、享保十六年の時に何らかの形で関わっていることが、表口から判明する。に何らかの形で関わっていることが、表口から判明する。世までに造立された神社の統計は五九社であり、そのうち世までに造立された神社の統計は五九社であり、そのうち世までに造立された神社の統計は五九社であり、そのうち世までに造立された神社の統計は五九社であり、そのうち世までに造立された神社の統計は五九社であり、そのうち世までに造立された神社の統計は五九社であり、子によれば、近り六分の一の数は、当地への宗教伝播の一傾向を示してい

る寺社を悉く真言宗として捉えているが、その一方で、かなる人物である。『津軽一統志』は、この円智上人に関わ③の「大聖不動明王」の開基とも伝えられる「円智上人」(その中にあって、注目すべき点がある。それは、表⊖の

### (『津軽一統志』に見る神社)

(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
山王大権現	熊野本宮大権現	森山毘沙門堂	藤崎毘沙門天	横内妙見堂(青森)	加茂大明神(浪岡)	八幡太神宮(浪岡)	八幡太神宮	熊野三所大所大権現	深沙大権現	聖観音	大聖不動明王	八幡太神宮	岩木山三所大権現	寺院名
同右	坂上田村麻呂大同二年	同右	坂上田村麻呂延暦十二年	坂上田村麻呂延暦十二年	同 右	坂上田村麻呂延暦十二年	不詳	不詳	坂上田村麻呂 大同二年	不詳	閣羅山を開墓円智上人、阿	不詳	延曆十五年	創立年次(者)
				孫九郎	同右	神職	(天台宗) 那智山袋宮寺	(天台宗)	<b>神宮寺(天台宗)</b>	久渡寺(真言宗)	国上寺(真言宗)	最勝院(真言宗)	真言宗百沢寺	別当(宗派名)
						如意山妙宝院退転前の別当は	同右	建立ともいう		<b>曽田智の創立</b>	毘沙門堂あり 建立の森山 付近に田村麻呂	陣所 坂上田村麻呂の この付近は	奉祭坂上田村麻呂の	備考

(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)
十腰内大石大明神	十腰内観世音	日照田薬師如来堂	乳井毘沙門堂	藤崎熊野大権現	赤石毘沙門堂	深浦薬師堂	深浦間口観音堂	桜庭地主八幡宮	桜庭千手観音堂	広船千手観音堂	田舎館大日如来堂	外浜十二所権現	浪岡牛頭天王	今淵八幡太神宮
同右	未詳	同 右	承暦二年	坂上田村麻呂 未詳	同右	同 右	同右	坂上田村麻呂 大同二年	未詳	同 右	坂上田村麻呂	同 右	同右	同上
右	百沢寺(真言宗)		福王寺	常 い に に	神職		善修験院		斎藤 大和守	広住院 院	大蔵院			
同右	を参考とおります。	作と伝う本尊は行基菩薩	再興とも伝う ・ 東上田村麻呂の ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	新城館・」 「住古真言宗寺院		作と伝う本尊は智証大師	作と伝う本尊は聖徳太子		建立とも伝う作と伝うのは、大師をなり、	伝う本尊は恵心作と				

遮羅尊寶寶 (後略)」と、表一の⑤の「深沙大権現」を動明王」を伝える「此山(古懸山)往昔円智上人鱗開基三阿すれば、一定の解決がえられる。すなわち、この「大聖不なりの資料的錯乱も見られる。この錯乱も、次の点に着目

伝える

く、天台宗であったのである。とを綜合すると、円智上人の建立した寺院は真言宗ではな

たのは、田村麻呂を媒体に、蝦夷平定事業に血道をあげる平安前期、この北奥の「蝦夷村」の宗教世界を彩っていかも、その深沙大権現を坂上田村麻呂に関連づけている。一文は天台宗の根本道場たる比叡山との関わりで捉え、し円智上人の開基と伝える阿遮羅の三千坊のことを、右の

呂の征討を通して、行政的に「日本」に編入されて、「み推測に推測を重ねていえば、「蝦夷村」は一方で田村麻

が織りなす、天台仏教ではなかったか。

桓武天皇と、官僧としてそれに応えようとする最澄の三者

## 二〈『津軽一統志』に見る寺院〉

(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
東福院	神宮寺	大円寺	久 渡 寺	国上寺	百沢寺	寺院名
天台宗	同 右	真言宗別行派	同 右	同 右	真言宗	宗派名
						本寺
不詳	大同二年	不詳	創立不詳。僧円智の	創立とも 不詳。僧円智の	不詳	創立年次
として再興。   頽廃後、袋宮寺	元和期旧に復す。真言宗に改宗、天正十五年に	村にあり初め、大浦種里	小沢村にあり真言五山寺、初め	真言五山寺	十腰内村にあり。真言五山寺、初め	備考

い。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしたれを受容することに、そう抵抗感はなかったかもしれなけとめたであろうか。旧「俘囚」「夷俘」の未裔たちは、にの行政と仏教の両面による「日本」・「日本人」化を、この行政と仏教の両面による「日本」・「日本人」化を、はとめたであろうか。旧「俘囚」「表行」の未裔たちは、それを受容することに、そう抵抗感はなかったかもしれない。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしい。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしい。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしい。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしい。その中には、依然として「蝦夷」(エミシ)たろうとしい。その行政というである。

ていた一群もあったに違いない。

世界が構築されていくことは必定である。また併せて脱「蝦夷」が深まることによって、「みちのく」いし「日本人」としてのアイデンティティの醸成が進み、時の推移とともに、この「蝦夷村」の中に、「日本」な

世界の構築は、平泉藤原氏の時代に及んで、一段と加速す「蝦夷村」の「日本」・「日本人」化を通した「みちのく」

〈平泉藤原氏氏の「蝦夷村」支配

る。

この点、前の林子平の『三国通覧図説』にいう「中ゴロノ漢文)に見るように、その北限は津軽外ヶ浜に及んでいた。ごとに笠率都婆を立つ。」(『吾妻鏡』文治五年九月十七日条、原河関より外浜に至るまで廿余ヶ日の行程なり。その路一町衡、六郡を管領の最初に、之(中尊寺)を草創す。まづ白平泉の藤原氏が現実に支配した「みちのく」の範域は「清平泉の藤原氏が現実に支配した「みちのく」の範域は「清

ることを見逃してはならない。

蝦夷国界」とまったく符合する。

尊寺供養願文」の一文は、その何よりの証左である。中していた点である。天治三年(二二六)の、いわゆる「中づからも「蝦夷社会」の血をひく一員であることを、自覚北の俘囚主」と自己規定していた清原氏のあとを受け、みら「東夷の酋長」「六箇郡の司」と名乗った安倍氏や、「山平泉藤原氏は、かつての「みちのく」の猛者であり、自平泉藤原氏は、かつての「みちのく」の猛者であり、自

なし」(原漢文)。 をうけ、職業を失うことなし。羽毛歯革の贄、参期に違い垂拱、寧息すること三十余年。しかる間、ときに歳貢の勤錘共、寧息すること三十余年。しかる間、ときに歳貢の勤従うがごとく、粛慎杷婁の海蛮、葵の陽に向かうがごとし。業をうけ、俘囚の上頭に謬居す。出羽陸奥の土俗、風草に常子は東夷の遠酋なり(中略)弟子いやしくも祖考の余

外からは、自己矛盾のなにものでもない「俘囚」呼称を夷社会」の一員であることを失念することはなかった。その支配の手を伸ばしていた平泉藤原氏にあっても、「蝦はもちろん、「粛慎・棍婁の海蛮」(北海道の蝦夷)にまで、「みちのく」の覇者として君臨する平泉の藤原氏にも、「みちのく」の覇者として君臨する平泉の藤原氏にも、

「蝦夷」(えびす)の住む、「胡地」ないし「狄地」(えびすの犯してやまい北辺地のことを、中央の都人は、この当時、自らに冠しながら、「みちのく」の征覇に余年のない平泉自らに冠しながら、「みちのく」の征覇に余年のない平泉東社会」の一員であることを失念することはなかった。

地)と呼んでいた。

かんともしがたい歴史の現実でもあった。 世界を、「日本」地化し、伴せて心奥までもを「日本人」 世界を、「日本」地化し、伴せて心奥までもを「日本人」 平泉藤原氏にとってみれば、この「俘囚」の自覚を伴ない ながら、桃生郡〜南部大間・津軽外ヶ浜までの「みちのく」 の事者・ ちのく」支配=「夷をもって夷を制す」状況は、なんとも 大のともしがたい歴史の現実でもあった。

承されてきたことは間違いない。

本されてきたことは間違いない。

本されてきたことは間違いながら、「みちのく」支配を余儀ないながらも、その意向を「迎え」ざるを得ない複雑な心情がながらも、その意向を「迎え」ざるを得ない複雑な心情がながらも、その意向を「迎え」ざるを得ない複雑な心情がながら、「みちのく」支配を余儀な中央の動向に気遣いながら、「みちのく」支配を余儀な中央の動向に気遣いながら、「みちのく」支配を余儀な

化はない。

ていき、そこに一定のアイデンティティが形成されていっていき、そこに一定のアイデンティティが形成されていっ「みちのく」世界が年を追うごとに「日本」「日本人」化し、平泉藤原氏による、この複雑ながらも土着の手によって、

この「みちのく」が「日本」ないし「日本人」としての

「中ゴロ」のなかでも鎌倉時代のことである。アイデンティティを、より一段と達成していったのは、

〈鎌倉幕府の東国経営〉

藤原氏そして頼朝というように、平安~鎌倉期において変『三国通覧図説』にいう「中ゴロノ蝦夷国界」は、田村麻呂、襲する津軽外ヶ浜を北限とするものであった。この点、の目指す領有の版図は、あくまでも、前の平泉藤原氏を踏め着くの最期の地でもあるこの「みちのく」に対して、す朝、ないのでは、しかし、頼朝による「俘囚の上頭」・平泉藤原氏の平定は、その頼朝による「俘囚の上頭」・平泉藤原氏の平定は、その

したことである。土着の論理ではなく、幕府という国家権力が直接的に関与土着の論理ではなく、幕府という国家権力が直接的に関与りの上で最も大きく変化したことは、平泉藤原氏のように、鎌倉時代が平安時代と、その「みちのく」世界との関わ

ノ堅メ」への登用がそれである。 北条義時による十三湊の安藤氏の「蝦夷管領」

「東夷

夷管領とす。」(「諏訪大明神絵詞」) 「武家其濫吹を鎮護せんために、安藤太と云う者を蝦

「安藤五郎ト云者、東夷之堅メニ義時ガ代官トシテ津」を発売している。

軽二置タル。」(「保暦間記」)

の系譜を持つ安倍氏の末裔たる津軽安藤氏を登用し、「夷というように、幕府は古代の「東夷の貧長」「六箇郡の司」

義時の治世を大きな転換点として、幕府と「み+島」への流罪執行に当たらせたのである。

どは、仏教史的な具体例であろう。り、後述する執権時頼の「みちのく」への「宗教の旅」なわりでいえば、北条得宗領の津軽地域への設定がそれであ世界との関わりは、年とともに深まっていく。経済的な関義時の治世を大きな転換点として、幕府と「みちのく」

に展開していたと考えられる。 をも巻きこむような、「蝦夷」同士の交易・交流が日常的いたことに思いを致すなら、「俘囚の上頭」の平泉藤原氏た。擦文文化という、すぐれて北海道的な続縄文時代に接世界の「日本」ないし「日本人」化に、少なからず苦慮し世界の「日本」ないし「日本人」化に、少なからず苦慮し一、果藤原氏も「俘囚の上頭」であるがゆえに、「みちのく」

生した。ときに、文永五年(二二六八)のことである。そ地との板ばさみにあえぐ安藤氏を直撃する事件が一日、発悩は、「蝦夷管領」への登用の日からはじまる。幕府と在この日常的な現実をみるにつけ、津軽安藤氏の民族的苦

へて堂塔多く造りし善人也。いかにとして頸をばゑぞゑぞは死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を 弁証

のことを、日蓮はこう伝えている。

にとられぬるぞ。 (「種々御振舞御書」)

へと発展していった。 「蝦夷」の血をひく津軽安藤氏は、「蝦夷管領」として、 の へと発展していった。 一般に「エゾの反乱」といわれ来から行き交う北奥~道南の「蝦夷」(えぞ)によって来から行き交う北奥~道南の「蝦夷」(えぞ)によって来から行き交う北奥~道南の「蝦夷」を計って、「みての職務遂行に励み、自ら脱「蝦夷」を計って、「みての職務遂行に励み、自ら脱「蝦夷」を計って、「みての職務遂行に励み、自ら脱「蝦夷」を計って、「みての職務遂行に励み、自ら脱「蝦夷」を計って、「みての職務遂行に励み、自ら脱「蝦夷」を計って、

目僧正有助、金剛夜叉頼演法印、道場東向南向連壇也正道潤、降三世社務、軍茶利安芸僧正御房、大威徳佐々守御亭・開白被、修・五壇護摩・一七ヶ月、不動大御堂僧正中元甲子(中略)五月十九日、為・蝦夷降伏・、於・大蜂起を鎮圧すべく、次のような修法を行った。

夷に対して、断固、本腰を入れて対処することとなった。蜂起を契機に、幕府はついに、道南の蝦夷も含む北奥の蝦「みちのく」を舞台にくり広げられるこうした「エゾ」

『沙汰未練書』にいう。

とは、まさにその法制的表明である。也。以上、如」此等御成敗、武家ノ沙汰ト云一、東夷成敗事、於『関東』有『其沙汰』、東夷者蝦子》

事

化を図った政策表明でもあった。 「みちのく」世界の、完全なる「日本」ないし「日本人」 表現をかえていえば、この「東夷成敗」は、幕府による

世界をより「日本」ないし「日本人」化しようとした、と やり、もって南部大間・津軽外浜を北限とする「みちのく」 いってもよいだろう。 「蝦夷」(えぞ) なるものを排し、それを「夷嶋」へと追い さらに一歩進めていえば、幕府は「みちのく」世界から、

よって、この「みちのく」が、前代にも増して、「日本」 的な風土となり、そこに居住する民も一段と「日本人」化 が「東国経営」という形で「みちのく」に乗り出すことに 土着の安藤氏のような現実的な苦悩をよそに、幕府権力

体事例である。

化していたのである。 のは、じつは、政治・経済領域だけではなかった。 いう、人間の魂の部分においても、「みちのく」を「日本」 幕府が「みちのく」を、このように「日本」化に導いた することは火を見るより明らかである。

宗教センター、心臓部ともいえる鶴岡八幡宮を一大拠点に、 であった。この幕府に固有な「禅密主義」こそが、幕府の 臨済禅と真言密教の総和たる「禅密主義」を標榜した世界 「武家的体制仏教」であり、これはもう一方の公家社会が 幕府の構想する宗教世界は、ごく端的にいえば、幕府

> 干満寺そして津軽の護国寺、山王坊などの改宗は、その具 ての「宗教の旅」=廻国伝道ではなかろうか。時頼は、こ 家的体制仏教」と捉える)と、基本的に対峠するものであった。 導して、改宗していった。松島寺や出羽の立石寺、 の天台宗寺院を、幕府の「禅密主義」に添うように宗教指 の廻国行脚を通して、前にみた「みちのく」における古代 ならぬ執権時頼が旅の修行僧に身をやつした「徴行」とし 公使という形で、扶植していった。その象徴的な形が、 らの権力基盤でもある東国地域に、一種の宗教的祭祀権の 志向する天台密教を中心とする「顕密主義」(私は、これを「公 幕府はこの独自の宗教世界を、公権力にふさわしく、自

要しまい。 宗教面においても、「日本」化していったことは、多言を 幕府の宗教的祭祀権の現実行使を通して、「みちのく」が、

を、平安〜鎌倉のなかで少し検証してきた。 本人」としてのアイデンティティがどう形成されてきたか 観点で、「みちのく」がいかに「日本化」され、そこに「日 以上、「政治権力によるアイデンティティ形成」という

ひとり政治権力だけではなかったことは、前述の幕府の「禅 国界」、すなわち「みちのく」世界の成立に導いたのは、 『三国通覧図説』のいう平安~鎌倉期の「中ゴロノ蝦夷

いていったのは、やはり、宗教的達人たる仏教者の一群でちのく」世界の住民に、本格的に「日本」的な魂を教え導密主義」の東国扶植からも了解されるところである。「み

# (B) 「仏教伝播によるアイデンティティ形成」

あった。

の伝播の波が、この鎌倉期に押し寄せていた。して、地方へと伝播していく。「みちのく」世界にも、そ教の時代」に相応しく、その宗派の教線は宗祖-門弟を通いわゆる鎌倉新仏教の誕生をみた鎌倉時代は、まさに「宗

こう伝えられている。 る「みちのく」布教は、『法然上人行状絵図』巻四十八に、例えば、浄土宗の場合、法然の高足・石垣金光上人によ

しこにて入滅。」の門弟を国々へつかはされし時、陸奥国に下向。ついにかの門弟を国々へつかはされし時、陸奥国に下向。ついにか奥にいたれることしりぬべし。嘉禄三年(二三七)上人「石垣の金光房は、上人称美の言を思うに浄土の法門閘

寺院を造営したりしていた(『親鸞聖人門弟交名牒』)。為子・唯信・是信・本願らが「みちのく」に弘通したり、あっても、親鸞の門弟のうち、東国出身者である如信・無上人が嘉禄三年に布教したのである。同様に、浄土真宗に浄土宗は、法然の「みちのく」伝道の命をうけて、金光

のく」江刺郡にまで旅の足を延ばしている。の一環として、祖父、河野通信の墳墓を詣ずべく、「みちては、宗祖一遍智真が、弘安三年(二二八〇)、「賦算遊行」黒山方面に教化していたといわれる。さらに、時宗にあっ黒川宗もやはり、鎌倉中期には、玉泉寺の了然法明が羽曹洞宗もやはり、鎌倉中期には、玉泉寺の了然法明が羽

本」化をとげ、マジョリティ(民族的多数者)としての「日た。そしてその結果、ここ「みちのく」世界は見事に「日のく」における「夷」(えぞ) 意識は徐々に超克されていっ力と、新仏教による「日本」仏教の伝道を通して、「みち鎌倉時代にあっては、以上のように、幕府による政治権

本人」が数多く創出されることとなった。

きな民族的犠牲を払うものであったことは、言うまでもな「夷」意識をなすりつけ、刻印するという、途轍もなく大

夷」(えぞ)すなわち、中世アイヌ民族に対して、新たなる

この創出が、「夷嶋」(えぞがしま)へと追いやられた「蝦

四 「みちのく」像の展開

渡道に幕が開く。

四三二、津軽十三湊に拠る「海の領主」安藤康季の敗走・念であった。「みちのく」像の第三段階は、永享四年(一のく」の第三段階を迎える。この第三段階たる南北朝~室のく」の第三段階を迎える。この第三段階たる南北朝~室の松前・熊石地域をもって「今ノ蝦夷国界」となる「みちの松前・熊石地域をもって「今ノ蝦夷国界」となる「みち『三国通覧図説』に従えば、武田信広の渡道以後、道南

である。

である。

は、周知のように、武田信広をはじめ、諸武の渡道には、周知のように、武田信広をはじめ、諸武には、近南の沿岸一帯に、世にいり、「道南の十二館」を築造していった。和人による和人の党」(「新羅之記録」)と結んで、道南の沿岸一帯に、世にい将が随従し、前の鎌倉期以後、渡来していた、いわゆる「渡石の渡道には、周知のように、武田信広をはじめ、諸武

渡道後、ほどなくしての「日ノ本将軍」康季の死、さら

「守護職」の補任方式に則って、三ブロックに編成した(『新四五六)。政季は離島に際し、十二館の館主間の支配版図を秋田男鹿に迎えられることになる。ときに、康正二年(二この嫡流の安東政季も、二年足らずして蝦夷島を離れ、

羅之記録』)。

論を俟たない。 ちの本格的な知人権力となる蛎崎政権の起点となることは、ちの本格的な知人権力となる蛎崎政権の起点となることは、に補任しての分割的支配体制をいう。この支配体制が、のに補任しての分割的支配体制をいう。この支配体制が、のに補任しての分割的支配体制をいう。この支配体制が、ので補任しての分割的支配体制を、下国定季を「上之国守護」(武田守護」(河野政通を補佐役)、蛎崎季繁を「上之国守護」(武田

は知内までとする範域が盛りこまれるに至る。には、和人の居住する「和人地」として、西は上ノ国、東蛎崎季広が定めた「夷狄之商船往還之法度」(天文二十年)「動を、「コシヤマイン」の戦い前後に展開する。その結果、活動を、「コシヤマイン」の戦い前後に展開する。その結果、この三ブロックに配された領主たちは、蛎崎氏の拠る「勝

南北朝以後に顕在化する「日ノ本将軍」安藤氏を筆頭にし「道南の十二館」の築造とこの「和人地」の特定化は、

の払拭 鎌倉期に胎動をはじめた「みちのく」における「夷」意識 における内発的な「夷」意識の超克に他ならない。平安~ た館主たちの系図作成と相まって、 は、 一方でこうした和人による「日本」「日本人」 すぐれて「みちのく」

の道南の「和人地」=「みちのく」にあって、民族的多数 ただここで注意すべきことは、熊石を北限とするこの期

みが、

北海道の「みちのく」に住む人々を、どれほど「日

アイヌ人たちに、刻印していった。

化を推し進めたが、他方では、新たなる「夷」意識を中世

ある。 ようとしている先住の中世アイヌ民族であったという点で 者(マジョリティ)を占めていたのは、 いま「夷」と目され

嶺を迎えようとする時期でもあった。 の民族的多数者(マジョリティ)の争奪をめぐる一つの分小 た康正二年 (一四五六) の「コシヤマイン」の戦いの頃は 「和人地」という北海道的「みちのく」世界において、そ

世アイヌ民族が、互いにしのぎを削り、民族的対立を迎え

道南に「十二館」が築造され、その和人集団と先住

の中

が、 あって、 ともあれ、「和人地」という北海道の小「みちのく」に 北奥地域の「みちのく」の「日本人」と均質化する上 自らの古代いらい背負い続けてきた「夷」意識を超克 大きく関わったものも、 新参の「渡党」や館主をはじめとする「日本人」 やはり仏教伝播という営みで

を送っていたことが、

しのばれる。

つまり、

中世和·

人地

いかに「日本人」化していったかを、次に掲げる「蝦夷島 中世「和人地」の人々が、日本的な仏教をどう受容し、 あった。

における中世寺院」で、少しく確認してほしい

界に、和人の宗教施設として造立されたのである。この営 のぼる中世寺院が、中世和人地=北海道の「みちのく」世 これによれば、一部の出入りはあるものの、十四ヶ寺に

本」「日本人」化したかは、 推測に難くない。

を紹介しよう。 和人的な宗教生活が営まれていたことを知っている。その 一つの例証として、「志海苔館」の周辺における宗教事情 私たちはこの十四ヶ寺の他に、道南の十二館の周辺に、

一つは、貞治元年(二三六七)の紀年を持つ、「旦那道

碑文の「阿号」や「阿弥号」に着目すれば、念仏系の信仰 年 (一四三九)の「脇沢山神社の鰐口」。この両者は、その 日 今一つは、「奉寄進夷嶋脇澤山神御宝前 慈父悲母尼公」の碑文を刻んだ、 施主平氏盛阿弥敬白」の銘がある、 いわゆる「貞治の板碑」、 いわゆる永享十一 永享十一年三月

「みちのく」像の成立と展開

の他に、このような「板碑」や「鰐口」を造作するまでに、 北海道における、北方「みちのく」の中で、前の十四ヶ

「蝦夷島における中世寺院」

		т												1
西	興 護 正	万	最	大 法	再再	成法	永	浄	松法	華上	随	海阿	寺	
	去一念	願	勝	恒	念	公   翁   華	善	願	源	上徳国	岸	渡	院	
	中	寺	院	寺山	寺	寺山	坊	寺	寺山	寺山	寺	寺 山	名	
浄		真	真	曹	浄	Н	真	浄	曹	浄	不	真	宗	
土真		言	言	洞	土真	蓮	言	土真	洞	土.		言	派	
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	詳	宗	名	
文章	<b>栃谷本</b> 赤崎本 大禄十	永禄八 蛎崎李広	永禄五	天文十五	天文五 蛎崎義広	(または享禄二) 大永元	文亀二	明応八	文 明 元	文正元	長禄三以前	康李)永享五(ま たは嘉吉三)	建立年代	
教	岌	不	不	宗	真	日	不	弘	随	秀	嘉	山	開	
												王	基	
西	西	詳	詳	源	徳	尋	詳	賢	芳	延	峯	坊	名	
専	智	阿	阿	秋	東	京	阿	東	秋龍	智	不	清	本	
念	恩	吽	吽	田円	本	都 本	吽	本	穏	恩		浄、	^ <b>r</b>	
寺	院	寺	寺	通寺	願寺	満 寺	寺	願寺	院	院	詳	心院	寺	
	丹下なる商人資本により建立			永正十年以前の建立、義広以後、蛎崎氏の菩堤寺となる。		日持伝説を参観すべし。上ノ国の法華寺、石崎の妙応寺もあり。	寿養寺と号す。昭和三年に慈眼寺と改号し、曹洞宗に属す。大沢に建立。永正十四年に徳山に移転。	上ノ国に建立ののち、秋田に移る。	奥尻島→徳山に移転、信広・光広の菩堤寺	建立時は真言宗、のち浄土宗に改宗	宇須岸→大館へ移転、文明十八年に焼失	茂辺地→大館へと移転	備考	

北方「みちのく」を、中世和人地に占定しつつ、自らの和人による「日本」「日本人」化が進んでいたのである。

いこ。イヌとは、じつのところ、その宗教観をまったく異にしてがにいま「夷」観念を押し付けられようとしている中世ア「夷」意識を仏教によって払いのけていこうとする和人と、

高なる精神世界を有していたのである。アイヌは他からの介入を一切うけ容れない、次のような狐に、伝統的な宗教観をしっかりと持ち合わせていた。中世中世アイヌ民族は、その「日本」化を試みる和人をよそ

の替り也と云。人死すれば其家をも調度をも皆焼捨の替り也と云。人死すれば其家をも調度をも皆焼捨まった。死を恐る、事甚しく、疱癒といふもの昔はなからしが、近頃はたまく、に有。是も捨避て養生を加へらしが、近頃はたまく、に有。是も捨避て養生を加へなべし。死を恐るる事甚しといへども、死するまうけるべし。死を恐るる事甚しといへども、死するまうけるべし。死を恐るる事甚しく、疱癒といふもの昔はなかりに避く。医薬なければ病彌重り、必ず死に至る。依外に避く。医薬なければ病彌重り、必ず死に至る。依外に避く。医薬なければ病彌重り、必ず死に至る。依外に避く。医薬なければ病彌重り、必ず死に若置てエゾ人多くは病なし。たまく、病者あれば家に捨置てエゾ人多くは病なし。たまく、病者あれば家に捨置て

たい。

伍 「むすびに代えて」

ないし「みちのく」像の展開の思想史的意味を、一言述べみとして捉えた小稿を閉じるに当たり、「みちのく」世界の生成→展開の営みには、私たちの想像を絶すその生成→成立→展開の営みには、私たちの想像を絶すをの生成→成立→展開の営みには、私たちの想像を絶すをの生成→成立→展開の営みには、私たちの想像を絶すとして捉えた小稿を閉じるに当たり、「みちのく」世界の生成→展開を、政治権力と仏教伝播という二つの物差しをもとにして、「夷」意識の北進化の営い方に、「古」を明している。

て、新たに造りて住むと云。(『東遊記』)

第一の思想史的意味である。

「夷」意識を自己超越し、均質的な「日本人」化たらんと 世的「夷」意識を押しつけることによって、自らの古代的 除者を創り出す。他でもなく中世アイヌ民族の創造である。 イデンティティになじまない、「みちのく」世界からの排 アイデンティティの形成は、その反動結果として、そのア 「俘囚」や「夷俘」たちは、中世アイヌ民族に、新たな中 「俘囚」「夷俘」による、この自らの「日本人」化という

「みちのく」=東北地方として固定化されるに至る。 策によって、いつしか、その「みちのく」範域も狭められ、 ちのく」範域も、近代における北海道「内国植民地」化政 なんとも歴史的な営みであった。北方にまで拡張した「み 「みちのく」像の生成→成立→展開とは、このように、

したとも言えようか。これが第二の意味である。

化させ、ついにはそのカッコつき「日本」「日本人」のカ う外的要因によりながら、自らの「夷」意識をかぶせ、転 ちのく」世界が、あくまでも民族的自決を保持しつづける 開とは、カッコつき「日本」「日本人」にはじまった「み 影はない。より端的にいえば、「みちのく」像の成立と展 「蝦夷」(中世アイヌ民族)に対し、政治権力や仏教伝播とい そこには、もはや、「みちのく」像の負の歴史的軌 跡 Ó

ッコを除去していく歴史的過程であったとも評せようか。

んな複雑な歴史の影が潜んでいるように思えてならない。 「みちのく」像には、冒頭でみた「旅情」とは裏腹に、そ

- 1 2 七号所収)。 拙稿「銭亀沢の神と仏」(『地域史研究はこだて』第二 海保嶺夫『中世の蝦夷地』(吉川弘文館
- 3 『国史大辞典』(吉川弘文館、高橋崇担当項)。
- (4) 高橋富雄『蝦夷』(吉川弘文館)、同『みちのく』(社 会思想社)。
- (5) 新野直吉「古代俘囚論」(『日本歴史』四三八号所収)、 高橋崇『蝦夷』(中公新書八〇四)。
- 〔6〕 喜田貞吉「蝦夷の馴服と奧羽の拓殖」(日本歴史地理

学会編『奥羽沿革史論』所収)。

- (7) 拙稿「鎌倉幕府の東国経営」(『国史研究』 九七号所収)。 拙著『中世仏教と鎌倉幕府』(吉川弘文館)。
- (8)(9) 拙稿「幕府・異域・宗教」(地方史研究協議会編『北 方史の新視座』所収)。
- (10) 『鶴岡社務記録』。
- 拙著『中世国家の宗教構造』(吉川弘文館)
- 二九、吉川弘文館)。 拙著『執権時頼と廻国伝説』(歴史文化ライブラリー
- 豊田武編『東北の歴史』上巻 (吉川弘文館)。
- 『日本仏教史』(法蔵館)。
- 銭亀沢編所収)。 拙稿「志苔館とその周辺からみる中世世界」(『函館市

(北海道教育大学教授)